

50
100 years history of Kokushikan since 1917

国士館一〇〇年のあゆみ

特集 国士館創立一〇〇周年記念



青年時代の柴田徳次郎

1919

世田谷移転と大講堂

一九一九（大正八）年、国士館は、世田谷の松陰神社畔に校地を得て、財団法人を設立し、教育の基盤を整えた。国士館の運営支援のために発足した「国士館維持委員会」には、頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰など各界の要人が名を連ねた。



1919年11月 国士館落成式・開館式



1920年頃 大講堂での阿部秀助講義



柴田徳次郎筆
「誠意・勤労・見識・気魄」(右より)



1925年6月 国士館完成長老会(於渋沢栄一邸)
(前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰
後列左より花田半助、渡辺海旭、柴田徳次郎)

1925

中等教育・ 高等教育機関の設置

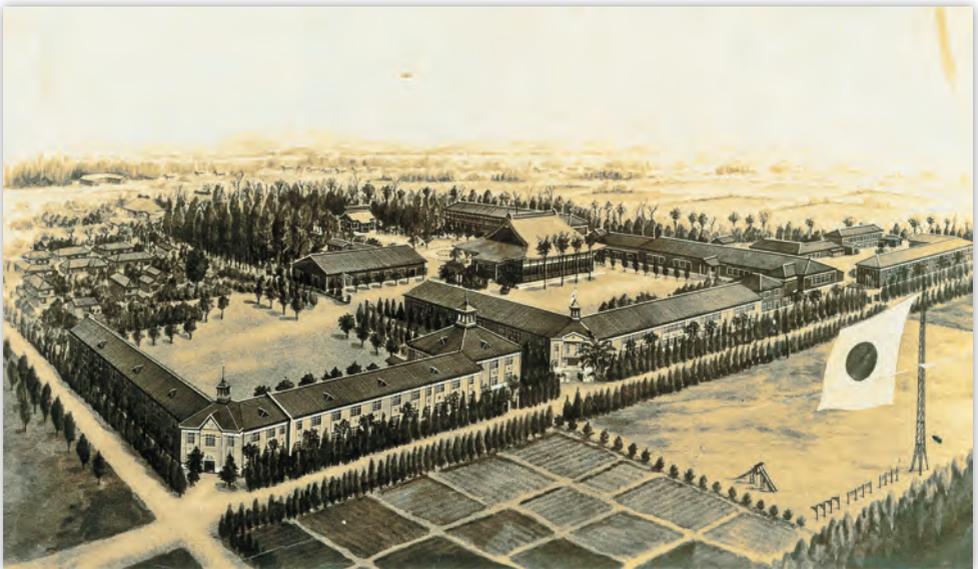
国士館は、一九二五（大正一四）年に中学校、一九二六年に商業学校、一九二九年に専門学校を相次いで設置し、法令に基づく諸学校を整えて特色ある教育を展開した。特に、専門学校では、剣道・柔道の武道と国語・漢文の教科を柱として、厳格な寮生活による心身の鍛錬と人間形成が図られ、文武両道の校風を高めた。



1932年 中学校校舎前の生徒



1942年頃 剣道の稽古



1931年頃 国士館鳥瞰図

1941

校風の発揚と戦争

一九三〇年代以降、諸学校生徒の活動は活発となり校風の発揚が見られた。一方で、戦時色が濃くなり戦局の悪化とともに、教育の場においても勤労動員や学徒出陣などによって勉学の機会が失われていった。一九四五（昭和二〇）年五月、米軍の空襲によって、国士館は校舎のほとんどを焼失した。



1940年10月 大運動会



1942年 軍事教練の査閲



1943年 出征の日の丸寄せ書



1939年頃 国士神社前での朝礼
(左は模造松下村塾「景松塾」)



1944年 出征生徒の送別

1946

戦後の復興と再建

第二次世界大戦の敗戦後、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策によって、国士館は、武道教育の禁止や「至徳学園」への校名変更を余儀なくされ、苦難の時期を迎えた。一九五二（昭和二七）年五月、緒方竹虎らによる「国士館再建趣意書」を発表し、八月には「国士館大学維持員会」が発足して、国士館の再建を支えた。



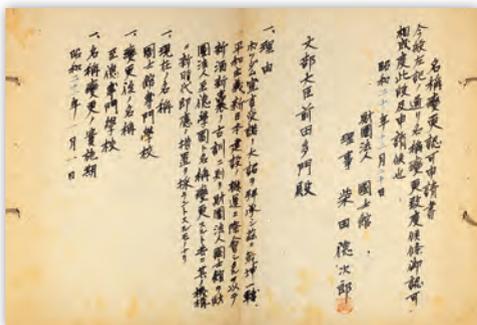
1947年8月 焼け野原となった国士館付近
(GHQ撮影/国土地理院所蔵)



1946年頃 至徳中学校の英語授業



1948年頃 壇上の校長鮎沢巖



1945年12月20日 校名変更申請書



1952年5月1日 国士館再建の会議



1946年 復学した学生

1958

国士舘大学の創設

一九五三（昭和二八）年、国士舘大学維持委員会の支援を受けて、「国士舘」の校名に復すとともに、国士舘短期大学を創設した。次いで一九五八年には、宿願の国士舘大学を創設し、体育学部を設置した。



1954年11月 短期大学校舎落成式



1958年5月27日 体育学部開学式を伝えた広報紙



1963年5月 日本体操祭での学生演技



1960年3月15日 体育学部第1期卒業生

1961

総合学園への飛躍

一九六〇年代、国士館は大学の拡充を図り、次々に新たな学部を設置した。一九六一（昭和三十六）年に政経学部、一九六三年に工学部を設置し、一九六五年には政経学部二部と大学院を創設、一九六六年に法学部と文学部を設置して、中・高・大・大学院を擁する総合学園に発展した。



1961年 5月27日 政経学部開学式



1966年 政経学部田村幸策ゼミ



1966年頃 工学部の授業(化学実験)



1968年 政経学部二部(夜間)の社会人学生



1961年 6月27日 『国士館大学新聞』第1号



1967年 総合学園となった世田谷校地



1973年 5月 文学部第1回初等運動会



1968年11月 法学部第1回模擬裁判



1966年10月 第1回中・高合同運動会



1965年 4月 大学院第1期入学式

1966

教育環境の整備と 特色ある教育

学生・生徒数の急増に伴って、世田谷校地では校舎や寮の整備を進めた。また一九六六（昭和四一）年には、鶴川校地（現町田キャンパス）を開設するなど、校地の拡充を図った。総長柴田徳次郎のもとで、国土館は「実践倫理」などの特色ある教育を展開した。



1961年頃 館長訓話



1963年頃 世田谷校舎正門と学生



1965年 女子寮の学生



1966年11月 創立49周年記念式典



1970年 鶴川校地

1973

創立者の逝去と 新たな学園への模索

一九七三（昭和四八）年に創立者柴田徳次郎が逝去した後、「近代化委員会」が発足して学園組織や人事制度、学内の諸慣行などの改革が行われ、式典での分列行進や学生警備の廃止、服装の自由化などが図られたが、その後も改革への模索が続いた。



1977年11月 柴田徳次郎銅像除幕式



1973年頃 服装自由化後の学生



1975年5月16日 電子計算機センター開設式典



1980年6月 第1回就職セミナー



1983年4月 柴田会館竣工

1984

学園の改革と組織の整備

急速な規模拡大と諸事業の展開により歪みが生じた国士館は、学内外から学園運営体制の刷新が強く求められ、一九八四（昭和五九）年より新体制へ移行した。学園は「国士館諸規定整備委員会」を発足させ、関連規程を全面的に整備した後、「将来計画委員会」のもとで今後の事業計画を策定し、飛躍への基盤を整えた。



1992年 多摩キャンパス開設と体育学部移転



1992年 完成した教室・管理棟(多摩キャンパス)



1992年 鶴川メイプルホール



1985年12月13日 第1回学長選挙



1992年 学生募集広告「maple」



1992年2月 入学試験

1994

中・長期計画と教育の拡充

一九九四（平成六）年に中期事業計画を打ち出した国士館は、一九九七年の創立80周年へ向けて、教育・研究、組織、施設・設備の充実を図った。一九九四年には中学・高等学校校舎を整備し、翌年には国士館大学福祉専門学校を太宰府市に設置するなど、時代の変化に対応して、教育・研究の充実を図った。



1994年 中学校・高等学校校舎



1994年4月 男女共学となった高校



1996年頃 福祉専門学校の介護実習



1994年 福祉専門学校の校舎(太宰府校地)

1998

21世紀への対応と諸改革

国士館は、一九九八（平成一〇）年に発足した「将来構想審議会」を中心に、新たな時代に対応するため全学を挙げて諸改革を行った。二〇〇二（平成一四）年には、短期大学を発展解消して21世紀アジア学部を設置するなど、教育組織の再編を図った。



1998年 中央図書館



1998年 体育・武道館



21世紀アジア学部の授業
(華道、日本の伝統音楽)



2002年 30号館(21世紀アジア学部棟)

2007

教育組織の再編と進展

国際化・少子高齢化など多様な社会的ニーズに対応するため、二〇〇七（平成一九）年に工学部を改組して理工学部を、二〇一一年には経営学部を設置し、また各学部では学科増設や再編を図った。大学院には、各研究科を相次いで新設して一〇研究科へと拡充し、大きな飛躍を遂げた。



2006年 体育学部スポーツ医科学科の救急処置実習



2017年 法学部法律学科の民事訴訟法(模擬法廷室)



2003年 ハイテク・リサーチ・センターパンフレット



開設パンフレット



2015年 全新生への防災基礎教育

2017

創立一〇〇周年と未来へ

二〇一七（平成二九）年の創立一〇〇周年へ向けて、二〇〇八年に梅ヶ丘校舎、二〇一三年にメイプルセンチュリーセンターホール、二〇一六年にメイプルセンチュリーセンター多摩など、各キャンパスを整備して教育の進展を図った。国士館は、次の時代を見据えて「人と社会を支える力」を一層堅持し、さらなる歩みが続いている。



2008年 34号館(梅ヶ丘校舎)



2013年 メイプルセンチュリーホール



2016年 メイプルセンチュリーセンター多摩



2017年11月 国士館100年祭での大提灯



2017年11月4日 創立100周年記念式典